

加能民俗

No.167

聞き書き「御陣乗太鼓」

— 奉納太鼓の戦後史 —

大門 哲

一 御陣乗太鼓といで湯太鼓

「名舟の御陣乗太鼓」は石川県を代表する芸能である。鬼気迫る演奏はほかに例をみない。その存在が詳しく紹介されるのは管見のかぎり昭和三十一年『民間伝承』掲載の小林昌人の短文報告が最初である。同報告から当時はいまだ台車の上の演奏が基本であったこと、義勇団が主催したこと、謙信伝説がすでに定着していたことなどを確認できる。民家研究で著名な小林だが、能登については「能登のタレ紙」（昭和三十六年『民間伝承』）も報告している。昭和二十八年頃から巻き起きる能登ブームが小林の関心を促したのだろう。

昭和三十五年四月に保存会が結成され、三十六年に市文化財に、三十八年に県文化財に指定される。一連の動きの背景には公演の増大がある。名人とされた故・池田庄作氏によれば、同一〇年代後半から徐々に声がかかるようになり、三五年から急増したという（『たいころじい』三一号）。

実際、昭和三五年以降になると、たとえば、三十六年に東京三越で催された「石川県の観光と物産展」（『北國年鑑 昭和三十六年版』）や東京文化会館で開催された第八回NHK全国民謡舞踊まつり（『芸能』五巻八号）、また三八年には第五回東海北陸近畿ブロック民俗芸能大会など大舞台への参加の様子が認められ、さらに同年には海外に招かれ、その名は全国に轟くこととなる（保存会HP、『たいころじ』三一号）。

御陣乗太鼓は異分野の芸術にも触発をもたらした。昭和三八年には西崎流創作発表会で舞踊「御陣乗太鼓」が催され（『時事年鑑 昭和四〇年版』）、三九年に第一七回カンヌ国際映画祭審査員特別賞を受賞した映画「砂の女」に登場し（『たいころじ』一五号）、また四二年には宝塚歌劇団星組の日本民俗舞踊「砂丘」で演じられた（『宝塚ステージアルバム舞台年鑑』第二〇集）。

現在、しばしば目にする日本海を背景に砂浜にたつ構図や仮面アップの写真が登場するのも同時期である。昭和三八年『北陸の旅』には海辺を背景にした見開き写真が、三九年『教育美術』に写真家・石元泰博の仮面アップ写真がそれぞれ掲載され（二五巻五号）、その後、類似の写真が各種媒体で用いられた。能登ブームの背景には日本海の厳しい風土やおどろおどろしい情念の世界への都市民の憧憬があったが、御陣乗太鼓の写真イメージは能登ブームを牽引する一役を担ったといえる。

留意したいのは、御陣乗太鼓は現在、石川県の太鼓芸の代表格に位置するが、戦後まもなくにおいては別の芸が先んじて評価を受けていたことである。昭和二六年「温泉雑記」には和倉温泉の太鼓芸について「この名物にいでゆ太鼓というのがある。もともいでゆ太鼓という名は最近につけたもので元来はこの土地のまつり太鼓であるらしい（中略）。初めは太鼓打ちを得意とする町の男衆が専らお座敷に呼ばれたものらしい」とみえ（『温泉』一九巻五号）、また三一年『トラベルグラフィック 能登特集』には「能登のお祭りには太鼓がつきもの」とし、「近ごろは和倉温泉の座興でみられる」とあり、さらに四三年『カラーガイドシリーズ 北陸』で

考では、一九五〇年頃からの流行が問題とされていた。第四の例で参照されたシュトロローベル論文は一九三九年刊であり、そこで批判されるフォークロリズム類似の現象は、当然それ以前からということになる。先の概要では記載しなかつたが、第四の結論の後に複数の祭礼研究が参照される中には、一八世紀に既に見られたシュトゥットガルトのフォーク・フェスティヴァルへの言及もある。

そもそもバウジンガーは、第二の例に関連して、移動の時代において集団、村、共同体は孤立していないと見ており、第四の例に関連しても、民俗文化そのものを孤立した自給自足のコミュニティの所産とするのはフィクシオンだとしていた。彼は、そうした民俗文化とフォークロリズムとを、とりあえずは相互に異なるものと捉えているらしいが、おそらく前者の自己同一性は曖昧で、後者と相互に浸透し合うと見ているのではないだろうか。

ともあれ、バウジンガーのフォークロリズム論（フォークロリズム批判に対する反批判）は、そうした民俗文化とフォークロリズムとが入れ替わる時間経過も含めて、視点を現在に置くのではなく、近現代ではあれ、ある程度の歴史的スパンを有する対象を想定したものと考え

られる。その意味で、都市民俗学とフォークロリズム論との両者を「現在」を主題化する方途である（掲載書六〇頁）として比較した川村清志論考は、少なくとも後者について出発点から破綻していたのではないか。

会務報告

（敬称略）

一 総会・研究例会

○総会

令和五年四月九日（日）

（於 石川県立歴史博物館）

- ・ 令和四年事業報告
- ・ 令和四年収支決算
- ・ 令和五年事業計画
- ・ 令和五年予算
- ・ その他

○四〇〇回研究例会

令和五年一月二十九日（日）

（於 石川県立歴史博物館）

「能登福浦湊の絵馬文化」戸潤幹夫氏

○四〇一回研究例会

令和五年四月九日（日）

（於 石川県立歴史博物館）

発表者…干場辰夫氏

テーマ…「新聞報道による鶴祭の変容」干

場辰夫

二 共催会

第四六回北陸三県民俗の会年會

令和五年八月二十七日（日）

（於 石川県立歴史博物館）

「北陸に伝わる〈蝦夷錦〉について」大井理恵

令和六年三月十八日 印刷
令和六年三月二十二日 発行
編集 加能民俗の会編集幹事会
発行 加能民俗の会 会長 小林 忠雄
石川県金沢市出羽町三番一号
〒九二〇〇九六三 石川県立歴史博物館内
振替口座 〇〇七五〇一九一三七三八
電話 (〇七六) 二六二一三三三六
印刷 株式会社谷印刷
金沢市中村町二八一四
電話 (〇七六) 二四二七二六六七